

「そして」による接続詞の接続類型

小林典子

要 旨

接続詞「そして」は「添加」あるいは「累加」の接続類型の接続詞とするのが一般的である。しかし、この「添加」「累加」は具体的にどのような意味関係を示しているのだろうか。これまでの接続詞研究では接続詞全体をどのように分類するかが主に議論されてきており、個々の接続詞の研究は非常に少ない。

本稿では、「そして」がどのような接続関係を表しているのかを、留学生の作文と、小学校、中学校の国語の教科書を素材に選んで、一つ一つ調べてみた。その結果「そして」には10種類の接続類型があるのではないかと考えた。この10種の「そして」の接続類型はより上位の類型とそれに含まれる下位の類型があることから、これを階層的に示すことを試みた。

【キーワード】 接続詞の分類 接続関係 「そして」

1. はじめに

文章論の分野での接続詞研究では、接続詞の分類が長年議論されてきた。どのような接続関係¹⁾を持つ文と文の接続に使用されているかに基づいて、個々の接続詞が分類表の中に位置づけられてきた。つまり、様々な文の接続関係を意味の上から整理分類し、次にその分類の中に個々の接続詞を入れ込んで接続詞を分類するという方法であったといえよう。各文法家によって接続関係の類型化も用語も多少異なるが、個々の接続詞は「順接」「逆接」「添加」「補足」「対比」など、接続関係の類型（以後接続類型と呼ぶ）のいずれか一つに位置づけられ、その接続機能のみをもつかのように片付けられているのが、現状であろう。しかもこのように分類された接続詞が文脈展開を理解する上での指標として利用されているのである。しかし、果して、一つの接続詞は一つの接続類型を名付けてそこに分類されてすむものであろうか。

これまでの接続詞分類は接続類型を先にたて、その類型に接続詞を入れこんで整理するといったアプローチであった。これからは、逆に、個々の接続詞が具体的な文章でどのような接続関係を示しているのか、考察してみる必要があると考える。一つ一つの用例を集め、それぞれの接続関係の意味を分析することで、個々の接続詞の意義特徴を記述する作業が必要ではないだろうか。意義特徴が掘り起こされるにつれ、その接続詞は意味から用法にいたるまで明確になっていくと考えられる。²⁾

そこで、筆者は接続詞「そして」が実際どのような意味関係の接続で使用されているのか考察し

た。接続詞の中で、最も多く使用されているのは、「そして」であり³⁾、幼児が最も早く使用し始める接続詞もまた、「そして」である⁴⁾と言われているし、留学生の使用する接続詞も「そして」が多いからである。考察の対象として、外国人留学生の作文と、小中学校の教科書を選んだ。

2. 先行研究での「そして」の分類

前節でも述べたが、先行研究は先に文と文の接続関係を分類してそこに接続詞を位置させる方法がとられている。従って、どのような接続類型を立てるかによって、「そして」の所属する類型も決められている。

永野(1959)は「前の事がらに次の事がらを付け加えたり、前のと並んで存在する事柄をあげたりするのに使われるもの」という分類に位置させ、このような接続詞を含む接続類型を「累加型」と呼んでいる。

塚原(1970)は立体的、階層的な整理をしているが、それによると、「展開的接続」(前件の内容をふまえて後件がでてくる)のうちの「列叙接続」(因果の緊密度がない)に含まれるとし、更にその中の「段階的構成」に位置づけられる「累加」という接続類型に入れている。

市川(1976)は、「二つ以上の事柄を別々に述べるのに用いられ、前の内容に付け加わる内容を導く」ような接続詞を「添加」とし、これの下位分類として「累加」「序列」「追加」「並列」をあげ、「そして」はこのうちの「累加」に位置づけられるとしている。

このような「添加」「累加」といった意味はどのようなものなのか、具体的で明確な説明はこれまで見られないようである。

3. 外国人留学生の「そして」の誤用

留学生の作文⁵⁾の中から118個の「そして」を検索し、これを調べてみた。まず、どのような意味関係の文脈を接続しているのか見るために、「そして」を他の接続詞などに置き換えてみた。

その結果、正しく使われているものは「それから」「それに」「また」「その結果」「そこで」「0」⁶⁾と置き換えが可能であった。これらは、時間的な推移に従って、文を連ねる場合(例文1)と、空間的、論理的な事柄の文を列挙する場合(例文2)、に大別できた。これは「そして」の用法として一般に認められているものである。

(1) 中文大学を卒業して、香港大学の教育学院で教師専門訓練を受けました。

そして、文部省の奨学金をもらって日本へ来ました。⁷⁾

(2) 窓の前に机といすがあります。そして机の左に本箱が二つあります。

一方、間違って使われていたものは、正しくは「また」「だから」「それで」「つまり」「特に」

「要するに」「このように」「しかし」を使うべきものであった。中でも特に多かったのは因果関係の「だから」の意味で使用しているものと、新たなものを切り出して加える場合の「また」の意味で使用しているものであった。「だから」と「また」の誤用は次に述べる「そして」の意義特徴を捉えていなかったのが原因であろう。

3. 1. 「そして」と「だから」

「そして」は条件論理的因果関係を示すことができない。従って次の例文では「そして」は使えず、「だから」としなければならない。

(3) *北回帰線が台湾の南を通っているので亜熱帯気候になっています。そして一年中暖かいです。

(4) *私の発音はおかしいです。そして毎日必ずこれをたくさん練習します。

(3) では、先行文に述べられている「北回帰線が通っているため亜熱帯気候である」という条件が、後続文の「一年中暖かい」論理的な理由として述べられている。同じように、(4) でも、先行文の「発音がおかしい」という条件が後続文「たくさん練習する」の論理的理由である。このような条件論理的な因果関係を「そして」で表現することはできない。

一方、「その結果」というような置き換えが可能な確定条件の結果は「そして」で示すことができる。

(5) 風の季節が来ると、たこで遊んだ。・・・みんなとたこを作った後で、たこの美しさ、大きさ、高さを比べた。そしてリーダーになった。

(6) その家がとても気に入りました。そしてヤンさんはその家に引っ越しました。

(5) は、子供の頃の思い出を語っているものであるが、先行文で子供達がたこの比較をしたことを述べ、その結果として、後続文で自分がリーダーになったことを述べている。また、(6) でも、ヤンさんがその家が気に入った結果、そこに引っ越した、という関係を述べている。このような確定条件を述べる場合には時間的推移があるために、「そして」が使えるようになるのであろう。

3. 2. 「そして」と「また」

「また」に置き換え可能な「そして」は時間的推移のない、並立的な添加の意味で使われた場合のものである。「また」に置き換えた「そして」の中には、「また」でも「そして」でもどちらで

もいい正用の場合と「そして」は使えないで「また」としなければおかしい誤用の場合とが見られた。次の例文を検討しよう。

(7) 新しいことばを書いたり、新しい言い方を読んだりします。そして妹といっしょに会話の練習をします。

(8) まず言語の障害を除去しなければならないので、日本語が上手に話せるように、日本語を勉強したいと思います。そして、自分の専門の学校教育についてもどんどん勉強したいと思います。

(9) ? 将来は日本語の本をアラビア語に直すつもりです。そして日本語の先生になることを考えていますけど出来るかどうか分かりません。

(10) ? 天気予報には二通りある。一つは一週間の天気予報。もう一つは翌日の天気予報。これは前者よりよく役立つ。そして、飛行機の着陸や農業も天気の変化とよく関係がある。

(7) と (8) を正用と考え、(9) と (10) は「また」と置き換えなければおかしいと感じ、誤用ではないかと考えた。「また」も、文の添加に際して使われるが、これには、先行文で述べた事柄とは少し別の角度からの添加、あるいは新しい項目の添加というような、感じがあり、先行文と後続文に少し距離ができるように思う。仮に、ある文脈内の共通の話題のまとまりをセットと呼ぶとしよう。「そして」によって、文を並立的に列挙する場合、それらの文はセットとしてのまとまりが感じられるものでなければ、座りが悪いのではないだろうか。例えば (7) では、日本語の練習を話題としているのであるが、「書いたり、読んだり、会話を練習する」、がひとまとまりのセットで、「そして」で接続されているし、(8) では、日本に留学してきて、「日本語を勉強したい、自分の専門を勉強したい」がセットになっている。一方、(9) はどうしても「また」と言いかえない。「アラビア語に直すこと」と、「日本語の先生になること」の間に距離を感じてセットとして捉えにくいからだろう。また、(10) では、先行文の話題は天気予報の種類であり、後続文の天気の変化の影響についての話題との間に、これもまた、やはり距離を感じるのが一因かと思う。セットとしてのまとまりを感じるかどうかはその文の文型（現象文、判断文等）、文末のモード、アスペクト、態、主題の取り方、など文の述べ方にも左右される。(9) では「アラビア語に直す」「日本語の先生になる」という事柄が接続されているが、前者は「する」動詞、後者は「なる」動詞であり、並立的なまとまりは感じられない。

このように、並立的な添加の「そして」は意味のまとまりのセットの中で使われているようである。

4. 小中学校の教科書中の「そして」の分析

分析の素材として小学校4年の教科書上下2冊、と中学校3年の教科書一冊をとりあげた⁸⁾。教科書であるから、文章の種類は多岐にわたっており、児童物語、小説、説明文、論説等が含まれている。「そして」は受け手（この場合、読み手）がどういう人か（教科書の場合、年齢）によって、使われ方の傾向が異なることが感じられた。また、文章がどういう種類のものかによっても違ってくる。例えば小学校4年の方では、時間的推移を表す使い方が一番多かったが（「それから」「その後」に置き換えが可能）、中学3年の方では空間的論理的な使われ方（「また」「その上」に置き換え可能）の方が多かった。中学3年の小説になると、作家の文章の作風によっては、特異な使い方をしたり、あるべきところで省略したりしてその効果を狙うという使われ方もでてくる。従って、「そして」の現れ方は、受け手をどのように想定しているか、どのような種類の文章か、作者の個性などによっても異なるといえよう。ただ、本稿では、そのような点を検討するのが目的ではないので、感想を述べるだけにする。

4. 1 分析の方法

「そして」の使われている文を前文一文、（文脈が辿れるように2～3文の場合もある。）とともに教科書からすべて抜き出した。次に「そして」の代わりに入れ替えが可能な他の接続詞や語句を複数個考え列挙した。その上で、それぞれの文がどのような接続関係にあるのかラベル付けした。ラベルは一文に対して一個つけるのではなく、考えられる接続関係をすべて付けた。例えば次の例文を見てみよう。

- (11) ごんは、ひとりぼっちのこぎつねで、しだのいっぱいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。そして、夜でも、昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。
(小4下 P60)

(11) は先行文と後続文とで「ごん」の暮しぶりをを並列的に述べており、「また」と置き換えが可能である。そこで＜並列＞とラベル付けした。しかし、この物語の文脈から言えば、後続文で述べられている「ごん」の「いたずら」が文脈を展開させることになっており、「ところで」と言い替え可能である。そこでこの「そして」は前置きから本筋へ転換する機能をもっていると考え、「転換」とラベル付けした。しかも、この後続文が「そして」によって強調されていると感じたので「強調」とラベル付した。つまり、この一つの「そして」に対して＜並列＞＜転換＞＜強調＞の三つのラベルをつけたわけである。

このように、個々の「そして」の接続関係にラベルを考えていったわけであるが、このラベルは市川（1976）や、塚原（1970）の接続類型に使われている用語や、Quirk（1972）の"AND"の分析に使われた用語を参考にして、個々の文の接続関係を説明するのに都合のいいように筆者が付けた

ものである。このようにして、全部で29個の「そして」を観察した。まだ、十分な数の例文を考察できないでいるが、それでも、一口に「添加」「累加」という用語では説明できないような多様な接続類型を「そして」が示していることが分かった。次に、これらの接続類型を紹介する。

4. 2 「そして」による接続類型

次に前節で述べた観察から得られた「そして」の接続類型について述べる。まず観察された接続類型を< >で示し、この「そして」と置き換え可能な他の接続語句を[]で示しておく。また、例文の「そして」に他の接続類型が考えられる場合にはそれも併せて例文の最後に示す。

4. 2. 1 <推移> [それから その後 やがて]

時間的経過のあることを示す。

先行文と後続文のどちらに書き手の意図の比重が重いかを見てみると<推移>以外の接続類型では先行文と後続文の両方に同じように焦点⁹⁾が置かれている場合と、先行文に焦点のある場合と、後続文に焦点のある場合とが見られたが、<推移>においては先行文に焦点がある場合は調べた中では見つからなかった。下にこれを図式化してみる。①が先行文と後続文の両方に焦点がある場合、②が後続文に焦点のある場合である。

<推移> 先行文 → 「そして」 後続文 (F：焦点とする)		
① F	F	(X：焦点はない)
② X	F	(→：時間の経過を示す)

つまり、<推移>の「そして」の場合、話しての意図は後続文にあることが多いと言える。

(12) まつがそれを聞きつけた。そして「姉さん、まだ寝ないの。」と言った。

(中3 p.66) <推移><結果>

4. 2. 2 <並列> [また と同時に]

先行文と並列的に後続文を述べる。先行文と後続文の項目を入れ換えたとしても意味が通じる接続関係を<並列>と呼ぶ。下図に示すようにこの<並列>の接続関係の文には焦点が先行文にある場合(① 例15)、後続文にある場合(② 例11)、両方に平均的な場合(③ 例13)、がある。焦点が先行文と後続文の両方に同じ重みである場合は二つの文が全く同等に列挙されていると考えられ、これを並列の中でも特に<典型的並列>としておく。

＜並列＞	先行文	－	「そして」後続文	(F：焦点とする)
	F		X	(X：焦点はない)
	X		F	(－：時間の経過はない)
	F		F	

(13)・・・この例文は、いわば旅での自然との出会いを書いたものだといえよう。津軽の広大な自然に対する感動が中心である。そして、時間的な順序によって書かれている。(中3 p.52) ＜並列＞＜典型的並列＞

4. 2. 3 ＜序列＞ [第一に 第二に 次に それから]

順々に事柄を列挙していく。時間的な経過のある場合とない場合の両方がある。

先行文と後続文の両方に同じように焦点が置かれており、どちらかに話の重点が置かれているわけではない。しかし、先行文と後続文の順番を入れ換えるわけにはいかない(例14)。なお以後、図の記号は前述の通りである。

＜序列＞	先行文	→	「そして」後続文
	F	－	F

(14) 文章の中から、色を表す言葉やにおいを感じる言葉を見つけて、ノートに書いてみましょう。そして、それが、この作品全体の漢字とどんなつながりがあるか話合しましょう。(小4上p.13) ＜推移＞＜序列＞

4. 2. 4 ＜補強＞ [本当に 実際]

先行文とほぼ同じ趣旨のことを後続文で述べ、先行文を補強する。先行文に焦点がある(例15)。

＜補強＞	先行文	→	「そして」後続文
	F		X

(15) しかしこれから生い立ってゆく子供の元気は盛んなもので、... 相変わらず小さい争闘と小さい和睦との刻々に交代する、にぎやかな生活を続けている。そして「遠い遠い所へ行って帰らぬ。」と言いつけられた父の代わりに、このおばあ様の来るのを歓迎している。(中3 p.63) ＜並列＞＜補強＞

4. 2. 5 ＜強調＞ [本当に 実際]

後続文に表現意図の焦点があるものは、「そして」によって強調されているように感じる(例16、

11)。

＜強調＞ 先行文 → 「そして」後続文
X F

(16) それ以来、けものたちの時代が7千万年もつづいてきました。そしてずっと後になって、わたしたち人類の祖先が生まれたのです。(小4上p.64) <推移><強調>

4. 2. 6 <転換> [ところで、さて、次に]

話題の新しい局面を引き出す働きがある(例17、11)。後続文に焦点がある。これは時間の経過のある場合も、ない場合もある。

＜転換＞ 先行文 → 「そして」後続文
—
X F

(17) それからのぼるはまくら木の上を歌うように数えながら歩き始めた。黒い馬、白い馬、赤い馬、青い馬、みかん色の馬、これで五つーというふうに。そして、3度目の「青い馬」までくり返したとき、のぼるは、耳たぶの後ろに鼻息を聞いた。
(小4下 p.9) <推移><転換><結果>

4. 2. 7 <結果> [その結果、こうして、そこで]

先行文は確定条件として述べられ、その結果として後続文が出てきている。先行文を前提として後続文がある。後続文の方に焦点がある。

＜結果＞ 先行文 → 「そして」後続文
X F

(18) 「ふん」と言って男は少し考えた。そして言った。「けしからん……」
(中3 p.70) <推移><結果>

4. 2. 8 <対比> [しかし、一方]

先行文と後続文が並べて比べられている。先行文が否定文になっていることが多いようだ。この場合、先行文と後続文の事実是对立していない。しかし、「述語①+否定+そして+述語②」とい

う文において、①と②が対比的である（例 19）。このような場合、英語では “BUT” を使いQuirk (1972)は“concession” という類型を立てている。対比の場合は先行文と後続文に同等の焦点がある。また、時間の経過のある場合にも、ない場合にも対比の接続関係が見られた。

＜対比＞ 先行文 → 「そして」後続文

—

F

F

（19）しかし、やっぱり、父ちゃんにも言わなかった。そして、父ちゃんのね入ったところで、そっと起き出して子馬を待った。（小4下 p.13）＜対比＞＜推移＞

4. 2. 9 ＜要約＞ [要約すると、今までの話をまとめると]

先行文の一文だけではなく、先に述べられているいくつかの文のまとまり全体を受けて要約する。（例 20）の後続文はそれ以前に語られている事柄の一般化であって、＜要約＞と言えよう。焦点は後続文にある。

＜要約＞ 先行文 — 「そして」後続文

X

F

（20）空気のように何気なく諸君が話している日本語というものが、実はどんなに大切なものを理解していただけたらどうか。そしてこのことは地球上すべての民族についてもそれぞれに言えることなのだ。（中3 p.197）＜並列＞＜要約＞＜強調＞

5. 「そして」が示す接続類型の階層性

前節では10種類の接続類型（＜推移＞＜並列＞＜序列＞＜対比＞＜強調＞＜転換＞＜補強＞＜要約＞＜結果＞＜典型的並列＞）を考えてみた。取り扱った用例の数が少なくて、一般化するには、無理があることは承知だが、これまで、＜添加＞＜累加＞といわれてすまされてきた「そして」も多様な意味関係を示していることがわかる。

多くの例文で「そして」は複数の接続類型を示していた。中でも、時間的な前後関係を表す＜推移＞と空間的な構成をする＜並列＞は他と共存することが多かった。そこで、この二者は他の類型よりも一段上位にあるのではないかと考えた。

また、話者の焦点が先行文にあるのか、後続文にあるのか、あるいは両方に同じ比重であるのか、が接続類型の解釈を左右した。そこで、このようなことを踏まえて、「そして」の接続類型を階層的にとらえ、図式化を試みた。（図1）

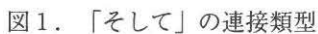
図1では「そして」を「添加」の接続詞とし、これの下に、＜推移＞と＜並列＞を位置づけた。この「添加」は塚原（1970）の定義に従うもので、第3節で留学生の誤用例を基に述べたように、条件論的因果関係は含まない。また、焦点（F）が先行文にあるか後続文にあるかをキーにして、体系化を試みた。この図に示したように「そして」の接続類型を階層的に捉えていく必要があるのではないかと考えている。

ところで、接続詞は文と文を結合させるものばかりではなく、文と文を切り離そうとする接続詞もあると思う。例えば、「さて」「ところで」などで、話題を切って、別の新しい話題へと転換させることができる。そこで、「そして」には、先行文と後続文を「結合」する働きのあることを「添加」のさらに上位に置く必要があるだろう。なぜなら、ここでいう「そして」に含まれる＜転換＞は転換といえども「結合」されたまとまりの中での転換であるからだ。「そして」が意味のまとまりのセットの中で使われるのではないかという指摘は、これも第3節で述べたとおりである。

「そして」がどのような接続類型を持っているかを図式化してみたわけであるが、これが、接続詞全体の体系の中にどのように位置づけられるのかは、他の接続詞の用例研究が充分でない現時点ではまだわからない。従って、図1において、「そして」が内包する類型を描いたが、「そして」と他の接続詞の関係を述べることはできないでいる。

6. おわりに

これまでの接続詞研究は文と文の接続関係を類型化し、どの接続類型にどの接続詞が入れられるか、という分類が中心であった。従って、一つの接続詞は一つの接続関係を示すかのように整理されている。「そして」の場合は「添加」あるいは「累加」と名付けられた一つの接続類型に分類するのが一般的である。しかし、「添加」「累加」といった一つの類型では説明しきれない多様な接続関係を「そして」は接続している。今後さらにもっと多くの用例について分析が進み、また、他の接続詞の分析とも比較できれば、「そして」の意義特徴が更に明確になろう。今後、「そして」以外の接続詞についても個々に具体的な用例の中で分析していくことが接続詞の意味体系を現出させていく上で必要なのではないだろうか。一つの接続詞を一つの接続類型に分類して済ませるこれまでの分類は不十分である。今後個々の接続詞の用例分析を通して接続詞の体系を見直していかなければならないと考える。



F: 焦点が置かれていることを示す

×: 焦点はないことを示す

→: 時間的な経過を示す

一： 時間的な経過はなく、並列的であることを示す

*： この型は今回扱った素材にはなかった

< >「そして」が示す接続類型

注

- 1) 「接続関係」「文脈」という用語は永野の定義に従う。永野(1975)は、「文章は文の連続として成り立ち、文脈を保ちつつ展開していくものである。文脈とは、最初の文から次の文へ、さらに次の文へという、隣どうしの文の意味の関係である。その隣あった二個の文の連続の関係を接続関係という。」としている。
- 2) 一つの接続類型の研究としては、岩澤(1985)が逆説をとりあげている。
- 3) 吉田(1987)の指摘による。
- 4) 早川(1987)の指摘による。
- 5) 文部省特別推進研究(1)6006001『日本語の普遍性と特殊性に関する理論的及び実証的研究』の研究グループの作った留学生の作文データベースから検索した。
- 6) 零の意味で、「そして」はなくてもいい。
- 7) 留学生の用例は「そして」以外の誤用は訂正して示して置く。
- 8) 『かがやき 国語 四上』光村図書(1985) 用例では(小4上)と示す。
『かがやき 国語 四下』光村図書(1985) 用例では(小4下)と示す。
『中学国語 三』光村図書(1985) 用例では(中3)と示す。
- 9) 先行文と後続文を比較して書き手の意図の比重がより重い方を「焦点が置かれた文」としておく。

引用文献

1. 『かがやき 国語 四上』光村図書(1985)
2. 『かがやき 国語 四下』光村図書(1985)
3. 『中学国語 三』光村図書(1985)
4. 留学生作文データベース(1987) 文部省特別推進研究(1)6006001による。

参考文献

1. 市川孝(1976)「副用語」『岩波講座 日本語 6』岩波書店
2. 一一一(1978)『文章論概説』教育出版
3. 井出至(1973)「接続詞とは何か」『品詞別日本文法講座 接続詞 感動詞』明治書院
4. 岩澤治美(1985)「逆説の接続詞の用法」『日本語教育』56号
5. 佐治圭三(1970)「接続詞の分類」『月刊文法』2-10
6. 塚原鉄雄(1970)「接続の論理—接続詞と接続助詞—」『月刊文法』2-2
7. 長田久男(1984)『国語連文論』和泉書院
8. 永野賢(1959)『学校文法文章論』朝倉書店
9. 一一一(1975)『文章論詳説』朝倉書店

- 1 0. 西田直敏 (1986) 「文の連接について」 『日本語学』 Vol 5-10
- 1 1. 早川勝広 (1987) 「言語習得における「接続」の問題」 『日本語学』 Vol 6-9
- 1 2. 森岡健二 (1973) 「文章展開と接続詞・感動詞」 『品詞別日本文法講座接続詞 感動詞』
明治書院
- 1 3. 吉田則夫 (1987) 「国語教科書の接続語」 『日本語学』 Vol 6-9
- 1 4. Quirk, Randolph, et al. (1972) Sentence Connection "A Grammar of Contemporary English", Longman, 1972.